

Title	花街における民俗の変容：京都北野上七軒の信仰の変化を中心に
Sub Title	Transformation of folklore in a Geisha community : with special reference to the change of folk belief in Kamishichiken, Kyoto
Author	中原, 逸郎(Nakahara, Itsuro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.75 (2013.) ,p.81- 100
JaLC DOI	
Abstract	<p>This thesis examines the transformation of the folklore of people living in a Geisha community, Kamishichiken, located northwest of Kyoto. In particular, it investigates how customs and habits have changed as a result of urbanization.</p> <p>Researchers have pointed that changes taking place within the city should be considered in terms of the relationship between residents and outsiders, which has had a strong effect on everyday life and has required the city to remain flexible. For residents of the city, life change has been intense as a result of the urban transformation. However, in spite of this transformation, the city life has remained much like that of a rural town, and I presume folk beliefs have played a major role in keeping civil life united.</p> <p>In this thesis, I mainly examine changes in the city's customs and habits, where we find the transformation of folk customs. I focus on a unique Geisha community located at the city border. In addition, I explore the issue of whether the Geisha community has produced new city folklore or has changed itself.</p>
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000075-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

花街における民俗の変容

—京都北野上七軒の信仰の変化を中心に—

Transformation of Folklore in a Geisha Community

—With Special Reference to the Change of Folk Belief in Kamishichiken, Kyoto—

中原 逸 郎*

Itsuro Nakahara

This thesis examines the transformation of the folklore of people living in a Geisha community, Kamishichiken, located northwest of Kyoto. In particular, it investigates how customs and habits have changed as a result of urbanization.

Researchers have pointed that changes taking place within the city should be considered in terms of the relationship between residents and outsiders, which has had a strong effect on everyday life and has required the city to remain flexible. For residents of the city, life change has been intense as a result of the urban transformation. However, in spite of this transformation, the city life has remained much like that of a rural town, and I presume folk beliefs have played a major role in keeping civil life united.

In this thesis, I mainly examine changes in the city's customs and habits, where we find the transformation of folk customs. I focus on a unique Geisha community located at the city border. In addition, I explore the issue of whether the Geisha community has produced new city folklore or has changed itself.

Key words: Geisha community, "hare" (non everyday life), folk belief, folklore, Kyoto

キーワード: 花街, ハレ, 民間信仰, 民俗, 京都

1. はじめに

都市化が進む中で、日常生活の中で無意識に考え、行動することで形成された民俗がいかに変化してきたかを京都の花街で考察することが本稿の主題である。有末賢は、東京の月島の事例を基に、都市での変動の担い手に注目し、都市独自の民俗の展開があることを社会学の観点から把握した〔有末1981: 111〕。これは倉石忠彦などの民俗学者が、農村と都市の連続性にこだわったこと〔倉石1990〕とは対照的である。都市民の中核には、日々の生活の中での「情動」（感覚や感情や行動の動機づけの体系として機能する精神活動の側面）の重視があり、変化に対応する柔軟性がある。ただし、都市でも

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程修了

農山漁村と同様に担い手としての常民を設定することは可能で、変動を焦点に把握できると主張する。そして、都市の変動は、定住者と漂泊者の交錯する関係性を軸に見ることも大事だという [有末 1981: 113]。確かに都市市民の流動性は高く、社会組織は複雑であるが、生活共同体のまとまりは農山漁村と同様に維持されている¹⁾。

民俗学者の櫻井徳太郎は、人間の生活では個人が孤立して生きる領域はきわめて少なく、人間同士が互いに多角的立体的な関わりを持ちながら生活しており、農山漁村と都市は相互に連続性に立った人生観や世界観があり、それを支えてきたのは民間信仰であったという [櫻井 1971: 16-17]。考察に当っては、成立宗教と民間信仰の狭間にある習合領域として「民俗宗教」を設定した [櫻井 1982]。都市においては担い手は複雑化し、伝承母体は変容して変化は進むが「民俗宗教」の果たしてきた役割は大きいという。本稿では「民俗宗教」は使わず、民間信仰を使用し、仏教や神道などの成立宗教とは分けて考える。

都市民俗学は、都市と農山漁村との連続性の上に立って、一般の人々、つまり常民が伝承してきた暮らしの実態や考え方の動態を考察し、都市の民俗の変化を考察することを基本的立場とした。こうした研究は、都市化による伝承条件の変化に伴う別の様相への変化、「民俗の変容」の研究へと展開する [宮本 2009: 280]。しかし、常民から更に一歩進んで、地域社会の外部と内部の接点に立ち、「情動」を究極まで洗練させて、都市の中で独自の非日常的な世界を構築してきた「花街」を考察した民俗学や人類学の研究は多くない。本稿は、民俗学の立場に依拠しつつも、「花街」は都市独自の民俗を作り上げる場であり、常に新たに構築し変化し続けて存続してきたという仮説に立って検討してみたいと思う。

2. 花街の研究

本稿で取り上げる花街は、芸舞妓がお茶屋で顧客を相手として、歌舞音曲、当意即妙の会話、飲食などのもてなしをする接客の場である。本稿での調査地である上七軒の場合は京都弁とも異なる独自の「花街言葉」を使う。柔らかく丸く響き、曖昧さを残す女性性に溢れる言葉である。花街は、京都ではカガイと発音するが、音読みでの名称が使用され始めたのは、1920年代の大阪においてである²⁾。元々の呼称はクルワ（廓）で、前近代の用語と思われるが、現在でも上七軒ではマチ（町）との対比で、自分たちの生活空間を指す用語として使用されている³⁾。これに対して市井、あるいは一般の社会をオマチ（お町）と呼ぶ。花街は古くからの慣習を大切にする都市の中の独特な遊興空間と言える。

花街は人とモノと情報が激しく行きかうマチ場の中に生成される独自の世界である。ムラを農業・林業・漁業等一次産業を基本的生業とする家々によって構成される社会 [福田 1983: 35-45] とするならば、花街はムラではない。しかし、伝統芸能と共に古くからのしきたりや民間信仰も継承されている生活共同体であり、伝承母体とも言える。同じ目的を持って全力でもてなしにあたる共同意志が存在する。まさしく都市の中でもムラの様相を色濃く止める、地域社会の基礎的なユニット [櫻井 1982] の様相を呈している。

関東では京大阪の「花街」に当たる芸者の生活世界を「花柳界」と呼ぶ。「花街」や「花柳界」という一見華やかに思える言葉には、独特の両義性が備わっている。それは女性を働き手とするジェンダー・ポリティックスの場で、お客という外部からの訪問者の経済的事情に応じて大きく変動する世界である。男女の微妙な駆け引きが繰り広げられ、お茶屋（置屋）との社会的付き合いが要求され、しばしば「一見さんお断り」の世界という秘儀性を帯びる。内部と外部のせめぎ合いの中で独特の座敷の雰

囲気が醸成される。

これらの花街や花柳界は現在では減少傾向にあるが、1956年には都市部を中心に全国に600箇所が存在していた[加藤 2005: 4]。京都の「廓」は、天正年間に官許の遊廓として成立した島原が古いが、経営を縮小した。現在では、祇園甲部・祇園東・宮川町・先斗町、そして上七軒の五つの花街が数えられる。五つの花街の中で、旧洛中にあるのは、上七軒のみである。まさしく、花街は都市を代表する文化の生産を担う場であった。上七軒の歴史は、他の京都の花街と同様に、寺社に隣接して発生し[相原 2009: 12]、年中行事と連動しつつ、遊びの場として、時を刻んできた。花街の特徴をよく表す言葉は何だろうか。それは「ハレ」の場ということである。民俗学では、非日常の「ハレ」とふだんの生活の「ケ」という局面の異なる生活によってメリハリをつけて生きてきたと理解する[宮本 2009: 279]。しかし、柳田國男が示唆したように[柳田 1993]、都市は「ハレ」ばかりの世界で、花街はその中でもとびきりの「ハレ」の場所、「ハレのハレ」の世界であった。

「ハレ」の定義は様々である。例えば、米山俊直は地域の居住者あるいは地域への来訪者が「自由なめまいと生きがいを期待する。」「[米山 1974: 212] という祭りのような場であるという。ハレを非日常性と考えれば、花街は昭和30年代までは昼夜を問わず接客が行われ、常に「ハレ」の場であったと言える。顧客が外部から集まり、花街が迎え「ハレ」の場に変容する。従って、農村を基盤に構築された「ケ」「ハレ」「ケガレ」の循環論[櫻井 1982]はなりたたない。都市全体がハレの中で、更なるハレを求め続けるのである。ただし、花街でも顧客が禁忌を犯すと、たちまちに厄払いの場となって、祭りの後の「ケ」のような場になる瞬間はある。花街は独自の慣習と規則によって支えられている社会なのである。都市においては、「ハライ」は重要な機能を果たしていた。

花街についての文献は数多いが、ガイドブック風の見聞記や、花街の経営者・芸舞妓の聞き書きが主であった。京都の花街の研究に関しては、言語を通じての花街の職業意識に関する調査[井ノ口 1967, 1968]が先駆的である。近年は花街の独自性が注目され、もてなしの経営学[西尾 2007]、顧客のオーラルヒストリー[西沢 2008]、顧客の歴史の変遷に関する実証的研究[矢野, 中谷 2011]など多方面に広がり、建築学からの考察も加わった[井上 2011]。ただし、民俗学では都市民俗学の観点からマチの地域性を把握する報告[田口 1983]がある程度で、研究はほとんどない。本稿で意図するのは民俗学が研究の中心にしてきた民間信仰を花街の実態から明らかにして、都市の民俗の変化を考えることである。

3. 上七軒

調査地の七軒については、近代の変化を考察した拙稿[中原2012]で述べており、ここでは概略に留める。京都の西北の北野天満宮の南に広がる門前町に展開する花街で、今出川通七本松西入から天満宮東門に至る通称上七軒通りを挟む両側の真盛町、社家長屋町、鳥居前町の三町から構成され、2011年現在10軒のお茶屋がある。お茶屋とは芸舞妓が顧客を接待する場所である。通常、花街は置屋(芸者を置く。屋形ともいう)、料亭(飲食を提供する接待の場)、検番(芸者を管理する)から構成されるが、京都では置屋が接待の場を兼ねてお茶屋と呼ばれる。お茶屋は宴会場のお座敷と、芸舞妓を取り仕切る「おかあさん」の生活空間からなる。食品衛生法(1947年法律233号)の規定で、お茶屋は料理を出せない^{たくみ}ので、関連する仕出し屋や飲食店が上七軒には多い。上七軒の商店街である匠会^{たくみ}の会員になっている飲食店の2割近くが元お茶屋である⁴⁾。上七軒は大正時代以降は、織物業で有名な西陣との関係

が深く [京都市編 1980: 49]。1990年代のバブル経済の崩壊前までは、上七軒とその周囲にも数多くの機屋はたやがあったが、現在では、多くはマンションや駐車場に変わった。和服離れも進み、かつてのパトロンはたやの西陣は凋落し、上七軒の顧客は西陣一辺倒から多様な顧客へと分散した。

上七軒の花街の起源は、室町時代の文安元年（1444）に天満宮の一部が焼失したので、十代将軍の足利義植が所司代 細川勝元に命じて、焼失社殿の造営をさせた時の残材で、東門前の松原に七軒の茶店を建てて参詣者の休憩所とし、七軒茶屋と俗称されたのが始まりという⁵⁾。起源譚については史料はなく伝説にすぎないが、上七軒と天満宮との密な関係は長く継続してきたと推定される。お茶屋の商売は不安定で、客次第で商売は浮き沈みし、時代の変化をまともに受けて生活してきたので、信仰が支えであり、神仏や小祠小堂の神々は心の拠り所であった。上七軒の周囲には、天満宮をはじめとして、東向観音寺、千本ゑんま堂、千本釈迦堂、妙心寺など由緒ある社寺が点在し、各々と深い信仰で繋がっている。女将や芸妓などの聞書きを通してその実態を明らかにしてみたい⁶⁾。

4. 北野天満宮

上七軒の生活は北野天満宮の年中行事と深く結びついており、参詣客が顧客であった。天暦元年（947）の創建と伝え⁷⁾、菅原道真（845-903）を祭神として祀る⁸⁾。道真公は「天神さん」として知られ、技芸や芸能の神、学問文芸の神とされる⁹⁾。都の「乾」（戌亥）隅にあたり悪鬼を封殺する社とい

表1 北野天満宮の主な年中行事

月日	名称	内容
1月2日	ふではじめ <small>てんまがき</small> 筆始祭・天満書	書道上達祈願。4日まで。
1月25日	初天神	新春参拝。合格祈願。
2月3日	節分祭・追儺式	災厄祓い。狂言・歌舞奉納。
2月25日	梅花祭 <small>なつねこく</small> (菜種御供)	祥月命日。菜種が梅花に変化。
3月15日	春祭 <small>としごいのまつり</small> (祈年祭)	豊作祈願。国家繁盛。皇室安寧。
4月5日	祈願絵馬焼納式	願掛け絵馬を焼く。中の森。
4月第三金曜～日曜	<small>あやこ</small> 文字天満宮祭	託宣者を祀る。12日～16日。
6月1日	火の御子社例祭	地主神の火雷神を祀る。
6月25日	<small>こたんしんさい</small> 御誕生祭・大茅の輪くぐり	誕生日。夏越天神で厄祓い。
7月7日	<small>みたらしさい</small> 御手洗祭・七夕祭	機織りの祖神を祀る。
8月4日	例大祭（北野祭）	勅祭斎行日。野菜の奉納。
10月1～5日	ずいき（瑞鑽）祭	神輿神幸祭。八乙女舞奉納。
10月29日	<small>よこうさい</small> <small>ひこうしき</small> 余香祭・披講式	重陽の宴の詩詠。ご詠歌。
11月23日	新嘗祭	新穀を供え収穫感謝。
11月26日	<small>おちやつばほうけんさい</small> 御茶壺奉獻祭・口切祭	献茶祭に使用する碾茶奉納。
12月1日	献茶祭	北野大茶会ゆかりの行事。
12月25日	<small>しまい</small> 終天神	1年締め括り。正月用品購入。
12月31日	大祓い・除夜祭	厄祓い。年越し。

う。天正15年（1587）には豊臣秀吉による北野大茶湯会が開催され、七軒茶屋を秀吉公の休憩所に充て、名物の御手洗団子を献じたところ、賞味に預り、褒美として七軒茶屋に御手洗団子を商う特権と、山城一円の法会茶屋株を公許したという。これが日本でのお茶屋の始まりと伝える。現在、上七軒花街が五つ団子の紋章を用いるのは、御手洗団子に由来するという。主な年中行事は表1のとおりである。

年中行事はおおよそ以下のように分けられる。新しい行事も含まれる。

- ① 祭神の縁日：1月初天神，2月梅花祭（薨去日），6月御誕辰祭，12月終天神。毎月25日。
- ② 社社の例大祭：8月北野祭。10月ずいき祭（明治以降に神幸祭として復活¹⁰⁾）。
- ③ 季節の行事：正月筆始め，2月節分・梅花祭，3月春祭，7月七夕祭，11月新嘗祭，12月除夜祭。
- ④ 祓いと厄除け：6月大茅の輪くぐり，12月大祓い。
- ⑤ 始原の祭祀：4月文子天満宮祭，6月火の御子祭。
- ⑥ 農耕儀礼：3月春祭，8月北野祭，10月ずいき祭¹¹⁾，11月新嘗祭。
- ⑦ 歴史上の記念日：8月北野祭，10月披講式，11月26日口切，12月1日献茶。

以上の年中行事のうち、上七軒が参加する行事は追儺祭と梅花祭である。追儺祭では上七軒歌舞会が日本舞踊を奉納して豆まきを行う。梅花祭では三光門前で野点をする。これは道真公1050年の大萬燈祭にあたった昭和27年（1952）に秀吉公が北野大茶湯を催した故事に因んで、「梅花祭野点大茶湯」として開催したのが始まりで、これ以後は毎年、上七軒総出（芸妓と女将）で行われてきた。昭和27年には「北野をどり」も歌舞練場で初めて演じられ、上七軒の看板行事として現在まで続いている。日程は4月15日から25日で¹²⁾、天神さんの縁日への奉納芸の意味あいが残る。また、ずいき祭でも八乙女舞の奉納の面倒を見るなど協力を惜しまない。7月3日には上七軒が中核を担う梅風講社¹³⁾が開催され、その後も何度か会合を重ねて10月のずいき祭へと徐々に結束を固めていく。

学問や書道など技能の上達を祈る天神への信仰は、踊り・お茶・三味線など歌舞音曲を重視する花街では、重要な信仰対象として日々の生活に溶け込んでいた。天満宮の門前町としての花街は、信仰・技芸・遊芸など独自のハレの要素を組み合わせた場所となった¹⁴⁾。

5. 上七軒と天満宮

上七軒と北野天満宮との関係についての聞き書きを紹介する。お茶屋では、床や扁額などに天満宮の神主の書が飾られ、天満宮への崇敬の気持ちが現れている。

「床（の掛け軸）は4代前の香西宮司。橘宮司さんののは表（玄関）に。また（掛け軸の）お歌は浅井宮司の仮名ですね。「惟かなながらの道」何も言わいでも神様にはお見通しという意味ですね。神道の真髓をなす。こういう所（お茶屋）には固すぎるけど、梶さんは「和魂漢才」と書いてくれました。歴代に書いてもらってます。」（話者B，平成21年9月21日¹⁵⁾）。

北野天満宮に対する親しみと誇りが示される語りもある。

「北野天満宮は全国に一万三千社ある天満宮の頂点。神戸にも北野ってあって天神さんが祀ってあるけど、お初さん（元芸妓）と一緒に連れていってもらった。そこは、外国人ばかりが住んではった。うちの家も天神さんの物置みたいな所に建てはった言うてはる。このあたりは、藪が多かったんです。」（話者C，平成21年10月4日）。異人館の立ち並ぶ神戸の北野天神と比較した語りである。上七軒は藪を開墾した土地として語られている。

10月のずいき祭には八乙女舞の奉納があり¹⁶⁾、指導は代々、上七軒の関係者が行ってきた。八乙女

舞は元々は天満宮の神事に奉納する巫女舞で、現在は梅風講社が差配する。

「私は、八乙女の指導27年間したので、天満宮からも感謝状もらったんです。私らのころ（昭和20年代初め）は、子供のころから見てたし、小学校4、5年くらいまではやってたんです。だから覚えてたんです。私は踊りで行きたい思うてたし、花柳輔四郎（花柳流の師匠）さんに教えてもらおうたし、姉の教え方もわかってたし、北野をどりも千度（何度も）出た。それで教えたんです。私もお宮からこんな（感謝状）いただいているくらいやから。でも今やったら、ビデオもあるし、先生いいですよ言われたんです。そんなやったら、もう解散式してしまったら、うちらも廓の人間やから、もういらんとしか取れへん。解散式して、こんなもうたんやから。奉行とかが、何でやめはったや言われるんやけど、そのころ後継者も学校の先生やってはって（稚児、八乙女を）放つたらかしやし、どうやったらいいかも分からないから、ぶらぶら歩いてて、（行列の観客から）汚い、汚い言われているんです¹⁷⁾。それで、周りから何であんたは、行かれへんのや言われたんですけど、姐さん（芸妓）こうこう言うたら、そら行かれへんな、言うてはります。稽古の時に私が、教えようと思って扇子持っていったら、先生ビデオありますから、だいたい教えられます言われた。どうして着物着ているのか、言われて。ペンしき持ってきてはらへん。私らと教え方違うし、それを言おうとしたら、わかりました言われたら、何も言えない。そこらが町で育った人と。私らみたいに廓で育ったもの違いなんやろか。」（話者E、平成22年7月19日）。

話者Eは天満宮から感謝状を頂いて、指導陣から退くことになった。八乙女舞はかつて西陣の繊維業者のTが金銭上も運営上も面倒を見てきた。Tと協力して運営にあたってきたEは、近年、指導方法や祭りの在り方が変わってしまったと落胆している。また、マチ（町）とクルワ（廓）で価値観や舞踊の習得の仕方が異なることを痛感している。別の話者は、ずいき祭で天満宮東門に入る神幸祭の行列を見ながらこんな話をした、

「最近千早（巫女の上着）が短いな。いや髪もこんなおっきないわ。おすべらかしも違うな。ちょっと不細工やな。（顔師の）Oさんももう（何も）言わへんね言うてはった。」（話者A、平成21年10月4日）、と話をした。

一方、昭和27年に始まった北野をどりでは八乙女舞は第一回から組み込まれ、舞台芸として演じられていた。当時の思い出の語りの中に登場する。

「私ら北野をどりの最初に『八乙女』で出ました。Yちゃん（後に芸妓）とか（後にお茶屋の女将）Mさんと出ました。そこに（『第1回北野おどり 北野天神記パンフレット』上七軒歌舞会、1952）名前載ってますやろ。『苗植える〜』、歌いながら、こないして踊ったんどっせ。65年前のこと、今も覚えてまっせ。」（話者A、平成21年9月21日）。話者は天満宮東門近くのお茶屋の娘として生まれ、八乙女舞を5年続けて演じた。現在では、八乙女舞も衣装も踊りも変化し、新作舞踊のようになったという。神事に奉納する巫女舞であった八乙女舞を余興イベントの「北野をどり」に入れたことは、大きな意識変革の始まりであった。

上七軒と天満宮との人間関係も次第に変化してきた。

「そのころ（昭和27年）の宮司さんやらみない人やった。宮司さんが手つないで、よう遊んでくれた。昭和20年ころとか（食べ物等）何もありませんやん。そやから、（祭礼で）御位もらいととか、御位返しでごつつお（御馳走）出るのが楽しみやった。今は、宮司さんとかも知らん人ばかりやねん。（神官は）どこかから来はって、またどこかにいかはる。何でも学校の先生みたいなもんやな（異

動が激しい)。時代が変わったんやな。かなわんな(がっかりする)。(話者A, 平成21年9月21日)。

戦後になって北野天満宮の職制も変わり、戦後に上七軒との関係が疎遠になったという。神社庁が統括して、店の名前に天神を付けることもうるさく言うようになった。北天満宮周辺の店舗は天神の名を冠したが、近年は天満宮が厳しく取り締まる。

「Kさん、天神と言うたはったら、あかん言われはった(天満宮から叱られた)らしい。(話者C, 平成21年10月31日)。天満宮と上七軒は発祥当初の伝説にも見られるように切り離せない関係にあって、信仰・経済・社交・娯楽など様々な面で結びついているが、常に変化し時代に対応しつつ維持されてきた。語りの中の社会変動は微妙である。

6. 寺院との関係

①東向観音寺

天満宮創建以前からの寺で、真言宗泉涌寺派に属し、北野天満宮に隣接する。延暦25年(806)の桓武天皇の勅を奉じて大納言の藤原小黒麿が皇城鎮護のために建立し、朝日寺と称した。天暦元年(947)に朝日寺の僧、最鎮らが天満宮を建立した¹⁸⁾。応和元年(961)、筑紫の観世音寺より道真公御作の十一面観世音菩薩を請来し安置された。境内には菅公の生母大伴氏の墓所である伴氏廟や、土蜘蛛塚がある。土蜘蛛は六斎念仏で演じられてよく知られている。上七軒との関わりは護摩供養を通してで、現世利益の祈願を行う。

「12月1日 東向観音さんの護摩木。100本くらい持って来はる。お父さんの泉湧寺の住職さんによる(よく掛け軸を)書いてもらってん。」(話者A, 平成21年9月21日)。

②千本ゑんま堂

正式名は光明山歡喜院引接寺といい、朱雀大路(現・千本通り)の北側、天満宮の東北にあり真言宗高野山派に属する。寺伝では小野篁^{たかむら}(802～853)を開基とする。篁は地獄に赴いて閻魔大王に会い、塔婆を用いて亡き先祖や精霊を再びこの世へ迎える供養法を教えられ、これを衆生に伝えるために堂を建て自ら刻んだ閻魔王像を安置したという。この供養法が後に孟蘭盆会へと展開した。篁はあの世とこの世を行き来する神通力を持つ人物とされた¹⁹⁾。寛仁元年(1017)源信の弟子の定覚上人^{じょうかく}が引接寺と命名して開山した。西陣を中心とする地域の町堂として貴賤の信仰を集め「千本ゑんま堂」して知られる。この地は「^{あだしの}仏野」「鳥辺野」と並ぶ平安京の三大葬送地の一つ「蓮台野」の入口にあたり、石仏や卒塔婆が無数にあったので「千本」の地名がついたという。死者供養の場所である。

八月盆に多数のお参りがあり、水塔婆を流し迎え鐘をついて、音に乗って帰ってくる「おしょうらいさん」を仏壇の扉を開いてお迎えする。孟蘭盆会ではかつては盆踊りも盛んであったという²⁰⁾。毎年8月にゑんま堂では六斎念仏が奉納される。西陣の土地柄を反映した華やかさが持ち味で、風流化が強く、研究者は「芸能系六斎」という²¹⁾。8月に入ると7日からお精霊迎いの「勸善廻り」を行い、講中門前で六斎念仏を奉納する。京都では一般に、7日から10日を「精霊迎え(六道参り)」として、先祖の戒名を書いたお塔婆を水をかけて流す「水回向」を行う。水塔婆ということもある。千本ゑんま堂や東山の珍皇寺に行くことが多い²²⁾。上七軒は「勸進廻り」で8月13日先祖供養を頼むことが多い。千本ゑんま堂では孟蘭盆の8月15日(平成23年以降は8月14日)に奉納する。地藏盆はすたれたが、子供は六斎念仏には積極的で、保存会にあたる「千本六斎会」に加わっている²³⁾。8月16日は精霊送りである。水塔婆に戒名を書いて、線香にかざし、仏印を貰って地藏供養池に流す。ゑんま堂は他界との交流

を意識させる境界の場で、死者供養と精霊送りの場として年中行事に組み込まれていた。

春の念仏狂言は5月1～4日に奉納され、最初に「閻魔庁」が演じられる。壬生寺の壬生狂言、嵯峨釈迦堂（清涼寺）の大念仏狂言と合わせて京都の三大念仏狂言という。壬生と嵯峨は無声、千本ゑんま堂は有声である。狂言は定覚の創始と伝える古い行事とされ、地域の人からは、鉦の音に因んでカンデンと呼ばれて親しまれている。

「わたしゑんま堂の向えで生まれたんですけど、カンデン、昔はね、高いところに狂言の舞台あったんです。今はないでしょう。櫻の花道の向こうに関係者が座れる席があって、子供のころ、そこの観覧席に座りたくて仕方がなかった。昔は山門があったから、しまつて見えた。町に入る境に堂がありますね。その先に蓮台野の十二坊がありますやろ。」（話者B、平成21年9月21日）。上七軒との関わりとしては、篠塚流の一派で月里流の流れを汲む女性が狂言の立ち方の指導をやっていた。上七軒の踊りは現在は花柳流であるが、江戸時代から明治時代初期にかけては篠塚流であった。

③千本釈迦堂

正式名は大報恩寺、真言宗智山派で、本尊は釈迦如来である。天満宮のすぐ脇にある。創建は鎌倉時代の安貞元年（1227）、開山は義空で、本堂（釈迦堂）は応仁の乱でも焼失せずに残った。2月はおかめ塚で節分を行う。12月7日、8日の成道会法要で、大根を炊いて信者などに振舞うことで知られる。これは鎌倉時代の慈禅が大根の切り口に梵字を書いて息災祈願を行ったことに始まる。最近では、7月初めの9日～12日頃に行われる陶器供養法要と陶器市で名高い。千本ゑんま堂と同様に8月の「精霊迎え」では「水回向」を行う。

④西方寺

真盛町にある天台宗の尼寺で真盛（1443-1495）の開基とされ、町名もこれに因む。

琵琶湖畔にある西教寺の末寺で、西方尼寺ともいう。西教寺は慈恵大師良源上人が復興して念仏の道場とし、文明18年（1486）に真盛上人が入寺し不断念仏の道場とされ、全国に約四百余りの末寺を有する真盛派の総本山となった。上七軒の芸舞妓は茶道をここで習う。尼講の集まりが毎月開かれる。女将を中心にお茶屋関係者が、毎月、西方寺に集まり、三十三番の御詠歌を唱え、茶話会をする。読み上げる調子が長唄や清元風になって、聞いていて楽しかったと追想するお茶屋の関係者も多い（話者A、C、D）。ご詠歌の後は楽しみの茶話会であった。花街数の減少や西方寺の考え方の変化で近年廃れてしまったという。

「尼講は、ご詠歌で、33番唄わはります。33番も長いけど、それが終わると裏（の33番）唄わはりますねん。」（話者D、平成24年9月16日）。「うちの女将さんは、お酒飲めなかったので、尼講に行ってお菓子食べるの楽しみにしてはりました。よく行ってはりました。集まってはったのはお茶屋の女将さんが中心でした。」（話者G、平成24年9月14日）。

地藏盆はすたれ六齋念仏は続いている。「各町内で地藏盆してて、西方寺さんも昔は地藏盆してたんやけど、まあ、（子供の歓声が）うるさいから、由緒あるとこやから、かなわん思わはったん違いますか。三十三番のお遍路さん（の世話を）してはったし、尼講やってはって、お茶屋のお母さんがやらはると、『お町』の人と違って長唄調、清元調になって。Yさん（お茶屋名）、ようやってはった。六齋念仏は毎年やってます。うちも呼んでます。」（話者C、平成21年10月12日）。「勧進廻り」として六齋念仏が回ってくる。上七軒にとっては最も関係の深い寺院で年中行事に組み込まれていた。

西方寺は天台宗であるので、比叡山の千日回峰行者も立ち寄る。市中大廻りの時には、深夜にお茶を

振る舞う。千日回峰行者は地元ではコンコンと呼ばれて親しまれている²⁴⁾。

「あの阿闍梨さん、夜中の1時半ころ、カーンって杖鳴らしてな。ここ二回ほど通らはるねん。毎日来はって。西方寺で休憩しはって、こう行って五辻の方に行かはる。」(話者A, 平成21年10月12日)。「上七軒あたりの方は(大津や坂本の)阿闍梨さんに、時々話、聞きに行かはって。内海さん²⁵⁾は知ってます。いつもやと、来はったで言うたら、コンコン来はったで言うて、話している短い間に来はる感じやけど、今回の人は、特急とどんこ(鈍行列車)みたいに違う。」(話者C, 平成22年12月25日)。

上七軒の人々にとっては最も馴染みのある寺である。

7. 民間信仰

① 清明さん

上七軒のお茶屋の屋号を清明神社の占いで決めたとする人がいる。平安時代の陰陽師の安倍晴明公を寛弘4年(西暦1007年)に屋敷跡(一条戻橋)に祀ったとされる。

「うちのお茶屋の屋号は清明さん(清明神社)につけてもらはったんです。」(話者C, 平成21年9月22日)。芸妓のうち自分の名を清明神社で占ってもらったり、占いで変更した者は、平成24年の時点で2名はいた。源氏名を清明神社の占いで決定したり、変更した上七軒の芸妓者も複数いる。陰陽師は占いの専門家と考えて安倍晴明に頼む傾向がある。しかし、清明神社が有名になったのはここ10～20年の間のメディアによる陰陽師ブームの影響によるところが大きく、鎮座1000年祭の2007年が頂点であった²⁶⁾。

② 庚申さん

赤い布に包まれた「猿たいこさん」のお守りをお茶屋ではよく見かける。「身代わり猿」や「括り猿」ともいう。6日に一度回ってくる庚申の晩に、天の神さんに告げ口されて災難に合わないよう、守ってくれるという信仰に基づいている。

「上七軒では、庚申さんを提灯に下げます。庚申さん、飛騨の『猿ぼぼ』とは違うてね。猿ぼぼは手足伸びてるけど、庚申さんは丸こい、(八坂神社の)鳥居のとこいつでも売ったはる。昔人形さんあったやろ。(買うのは)年中やね。昔は自分の家で縫うたんやな。お稲荷さんのとこに『猿たいこさん』たくさん吊ってあったけど、頭のような丸こいもんがいっぱいでした。」(話者E, 平成24年9月16日)。

話者のAやCによると、お守りは祇園の八坂神社の正門近くの販売所で購入し、その時期は特に定まってないという。かつては各家庭で手縫いして作っていたともいう。中に御本尊の青面金剛の御札が納められ、開眼の秘法によって靈魂が込められているとされる。吉祥天のお使いともいう。庚申の申と繋がるのである。猿が手足をくくられて動けない姿を表し、人間の中の「欲望」が動かないように括りつけられた姿だという説明もある。上七軒においては庚申さんのお守りを提灯に下げる(写真1)。花街には年少の者(舞妓等)がいて、三尸の虫が身体から出て天に昇って告げ口をして、年少者に悪さをしないためのおまじないと言う。紅燈にいつ頃から付けるようになったかは伝えられていない²⁷⁾。

庚申さんの信仰は上七軒では盛んだとされ(話者D)、明らかに町場の信仰である。

上七軒で独特なことは、8月23日の地藏盆が庚申信仰と習合していることである。

「地藏盆にも庚申さん(くくり猿)使います。」(話者B, 平成21年9月21日)。地藏盆は都市の年中行事で、地藏さんを化粧して子供たちがお祀りする辻ごとの祭りで、成長祈願や健康祈願の目的で庚申のくくり猿が習合したのかもしれない。



写真1 提灯に吊るされた庚申さん（著者撮影）。



写真2 Bのお茶屋の住吉さん（原千晶氏撮影）。



写真3 鏡台右側の住吉さん（著者撮影）。

③住吉さん

お茶屋の玄関を入るとすぐに目につく縁起物の「住吉さん」は、京都のゑびす神社（東山区）²⁸⁾の「十日ゑびす大祭」（正月8日～12日）で境内の外の露店で購入する。正月の縁起物で、商売繁盛と家内安全を願う。大阪の住吉大社の縁起物と異なる独特のもので、最大級のものは2万円くらい、筐に蔵などの置物が沢山ついている。形態は藁で編んだ直径1mもある天蓋²⁹⁾に筐が被せられ、下に沢山の住吉踊り³⁰⁾の白黒との人形が吊るされている（写真2, 3）。一般の商店も用いるが、花街での紙人形は白黒と決まっている³¹⁾。



写真4 上七軒の元お茶屋に残る布袋像（著者撮影）。



写真5 上七軒のお茶屋Mの屋根を守る鐘植瓦（著者撮影）。

「京都のえべすさん（夷さま。恵比寿さま）だけでね、住吉さん吊るのは。西宮や大阪のえべすさんは住吉さんありませんね。」（話者B，平成21年10月12日）。

住吉さんの名称は大半の者が知っている。お茶屋では人形の色は白と黒が好まれ、赤や金は一般の店舗で用いられる。聞き書きでは、客寄せに用いる（芸妓K，元お茶屋女将A，現役の女将B，ベテラン芸妓D，祇園甲部バー女将F）という回答が多く、購入時には「えびす門」をくぐる前に買う（芸妓K），門をくぐった後に買ってもよい（A，F），お茶屋経営者は、買い方にこだわりのないが、芸妓は人形の数や買う場所を気にして個々に解釈をしている。お茶屋に飾る「住吉さん」は30ヶ所を越える。鏡台のところに「住吉さん」の人形を架ける慣習が、上七軒の女将や元現役の芸舞妓にある。芸舞妓が最も身近な場所に置く守り神さんということになる。一方、元仲居Gによると、「住吉さん」を飾り始めたのは、上七軒では昭和40年代以降という³²⁾。古い習俗ではないようだ。商売繁盛の縁起物とされて、町場で一挙に広まったと見られる。

④布袋さん・鐘植さん・巳さん

西陣を含め、上七軒ではオクドさん（竈）に布袋さんが供えられる。代々、オクドさんを持つ家では、10体以上布袋さんを置く家もあるという（写真4）³³⁾。布袋さんは七福神の一つで、家に福を齎す神とされ、日々の食べ物を調理する日常の場に祀られる。

「オクドさんの上に布袋さんがいはって、荒神松があって。お榊やけど、熊笹が『びゅう』と並んでるえ。」（話者A，平成21年9月22日）。木造建築物が多いので、火伏せの神として知られる愛宕山（上京区）の火除けの御札は必ず置いてある。上七軒の屋根の上に魔除けの鐘植の瓦が載り家を守っている（写真5）。特に疫病除けに効果がある。祇園では屋根に祀るのは毘沙門天とする所もあり、北方守護から転じて悪いものを退ける機能が持たされる。

巳さんの信仰は篤い。あるお茶屋では、白蛇の「よしなが大明神」が住みつき、家を守っていると考えている。地主さんとも呼ばれるが、天満宮内の地主神社とは違うという。

商売運を守ると信じている神で、信仰が極めて篤い印象を持った。「福神さん」や「荒魂さん」が崇拜される（写真6）。「うちに祀ってあるのは、地主さん、お稲荷さん、福神さんなど、みな古い家にはいはる。みんな（それぞれ家に居ついて確実に）いはるねん。ある時な、ある家で奥さん亡くならはってな、ふと見たら巳さんがいはるんやて。それで旦那さんが（白蛇を）怖がらはって洗剤かけはったら



写真6 A宅の福神さん(左)、巳さん(右)(Aの写真を著者複写)。

な、(運悪く)巳さんの口から入ってな、そしたらそのご主人お腹こんな膨れて死なはったんやて。そやから、(だから、巳さんを)ほっといたらいいねん。何もしなかったら(家族を)守ってくれたはるのに。私も昔な、夏クーラーない時分(1950年代)簾吊って岐阜提灯吊ってはる時に、(座敷の)手すりのとこに白いお姿で出はった。若いときは嫌や思うたことがありました。今は、家替えとかの時もな、巳さん怪我しはるし、のいといて(避難して)くださいね、言うてます。」(話者A、平成21年10月12日)。巳さんは家にいつく神、福をもたらず神の性格が強く、逆らうとよくないことがあるとされる。

民間信仰の神々には新しいものも加わる。韓国のお守りは、金運を呼ぶとして、上七軒で流行しているが、これは合成樹脂製の唐辛子が10個程度ついたものである³⁴⁾。

⑤ 祇園甲部との比較

上七軒では各部屋の裏鬼門(南西)に、紫陽花の花を括って、「逆さ」に吊るして置く習慣がある。西陣に元々ある習慣だと言ひ、下半身の病気にならないとか、鬼門に生じる邪気を祓うともいう³⁵⁾。地域の習俗は必然的に花街の中に入り込む。毎年、7月に行われる八坂神社の祇園祭りでは、山鉾町の家々では、粽や稲を壁に「逆さ吊り」にして疫病除けを願う習俗がある。「逆さ」には同様の意味があるのかもしれない。まじないに近いことは、上七軒では毎月八の日には海藻のアラメ(荒布)を食べる習慣があり、健康を祈るまじないかもしれないが、実質的には栄養補給でもある。この習俗は祇園にはない。

祇園甲部では技芸の上達を祈る稲荷社への信仰が篤い。井上流の踊りの師匠宅に向かう道筋に祀られている。お茶屋の神棚には伏見稲荷神を祀る。祇園甲部の歌舞練場内には、崇徳上皇の御霊が祀られ、毎月21日が祭日である³⁶⁾。祟りなすがゆえに強力とされ、牛頭天王という疫神を祀る祇園の信仰と繋がる。祇園甲部では清明さんの信仰はなく、オクドに布袋像は祀らない。しかし、オクドの周りに布袋像を飾る風習がかつてはあったといい(祇園の女将H)、決定的違いではない。愛宕山の火除けの御札を祀ることは上七軒と同様で、実際に登拝して受領してくる風習が残っている。上七軒と清明さん、祇園と牛頭天王という地域の有力な神との関係の違いが浮かび上がる。

祇園甲部には巳さんの信仰はないが、七福神を鬼門となる場所に祀ったりする。オクドさんには布袋さん、便所には弁天さん、入口には毘沙門天と祀った。上七軒で屋根に祀る鐘馗さんは、祇園では毘沙門天と解されている(話者FとH)。商売繁盛を祈る福神信仰は上七軒と共通する。祇園では餅屋さん

に頼んで各部屋に「ほしつきさん」を祀る。丸い小餅に星のようなかたまり（おけそく）をつけたもので乳首にも見える。安産祈願の習俗が豊饒多産から福を呼ぶ習俗となったものかと思われる。お茶屋では「三宝さん」を架ける杭が各部屋にあり、いつも吊るして置く。「三宝さん」とは櫛の後ろに松をつけたもので、荒神松ともいい、三宝荒神を表すとか三体の神さん（水神・地神・荒神）がいるとされる。「三宝さん」は、女将自ら、裏白とゆずり葉を水引で括って各階に置く。各部屋の床、台所、洗濯機にも祀る。水回りに置くのが本来のやり方ようだ。部屋の端々に鏡餅をゆずり葉の二枚重ねの上に乗せてお供えする。祇園では家の中に総計で11か所にお供えするお茶屋が二軒あり、そこでは正月の餅飾りはしないと。鏡餅は神棚や玄関にお供えすることが多いが、オクドさんの神さまには必ず供えることになっていて、あかりを灯しお水を挙げて毎朝、家族の健康を祈った。「お鏡さん」と親しみをもって呼びかける。このように、家の各所で神様を祀る。元々は京都の一般的な風習であったと言う。しかし、一般の家では略式化されているが、花街では大事に守られている。祇園甲部のお茶屋は、毎日清め祓いして結界を施し、家の中の各所や部屋の床に神迎えをして客を迎えるのである。上七軒にはない習俗で、民間の正月行事を日々実践しているのである。その意味ではお座敷は毎日が、ハレの空間として維持されていると言える。

花街では地域の顧客との長い付き合いの中で独自の習俗を形成してきた。顧客は、芸舞妓の芸の習得に資金援助し、家庭に出入させた。従って、顧客の家や地域社会の習俗は花街でも熟知・尊重されてきた。顧客の商売の在り方も花街に影響を及ぼす。上七軒は西陣の織維関係者（機屋）が中心、祇園甲部は伏見の酒造業、金融業者が中心で、相互の習俗や気風の違いは、地域社会との交流の中で独自の花街の民俗として定着することになったのであろう。

8. 上七軒の信仰の特色

上七軒での聞き書きから信仰に関して以下のような点を指摘できる。

第一は、信仰対象が極めて多様なことと、積極的に新しいものを取り込む意志があることである。北野天満宮や複数の寺院、そして家の中の神々まで、様々の願いが籠められる。芸の上達・商売繁盛・家内安全を願う花街の信心深さの表れともいえるが、経済や社会の変化に敏感に揺れ動く不安定な客商売への対応とも言えよう。その中でも福神が家の中に多く祀られているのは花街の仕事が商業であり、経済活動と強く結びついているからである。

第二は、信仰には中心がある。上七軒の場合は北野天満宮の門前町であり、天神さんを中心に生活世界が構築されてきた。天神さんは技芸の神であり、歌舞音曲、そして茶道・書道・華道・和歌などを商売道具にする花街の芸舞妓にとって信仰対象として誠に相応しい。現在は学問の神様として知られているが、東向観音寺の副住職等によれば、昭和40年代の受験ブーム以降に盛んになったもので、修学旅行による観光の隆盛とも関係があるという。信仰の内容は時代と共に変化してきたが、高度経済成長以後は大きく変容した。

第三は、尼寺である西方寺が地域社会に及ぼす影響が大きいことである。尼講を組織し信仰やつきあいを介して女性たちのネットワークを維持してきた。経済的には上七軒の土地の多くを所有しており、御茶屋の多くが店子、つまり借地権者であるために土地の売買が制限されて、マンションやビルなどの近代建築物が建たず、花街らしさが崩れない。地元民は将来的にもマチ並みを一定に保てると考えている（話者A, E）。

第四は、民間信仰としての占いが重要な位置をしめることである。お茶屋や飲食店の屋号や、舞妓の源氏名を決める時には清明神社で占ってもらう者が多い。特に源氏名(芸名)を決める時に神の意志に委ねることは、浮き沈みが多く不安定な商業活動に携わる者にとっては必然である。神の意志に未来を託すのである。祇園甲部の場合は、源氏名の決定は、自分の家で行う。源氏名はお茶屋に伝わる名前、つまり、過去の芸舞妓の名の一部を上の名として選び、下の名は先輩(行儀や芸を教える)の芸妓が籤を引いて決める³⁷⁾。お茶屋内での名前継承が同業者の籤で決定される。この場合は、籤引きも神の意志と言えるかもしれないが、今後は芸仲間となり疑似家族として生きていく人々の意志が強く働く。

第五は、占いや籤によって決まった源氏名を通じた人間関係の重要性である。芸の「縁」での繋がりはウチウラ(内裏)と呼ばれ、強い結束力を発揮する。源氏名をもらってこの世界に入ると先輩や朋輩を「おねえさん」と呼ぶ。姉芸妓と芸の上での「疑似姉妹」になることで、芸の縁を深化させていく。ちなみにお茶屋や置屋の経営者は「おかあさん」で、全体が一つの家族と見なされ、運命共同体の性格を持たされる。ウチウラは相互扶助の関係で、花街の芸の先達が外部者を組織に取りこむ際に効果を発揮する。芸の継承が要である花街では、源氏名の決定は人生の行方を決める³⁸⁾。ちなみに、ウチウラとは京都の市井では広義の「親類」の意味である。占いが運命を決める。占いが多用されるのが芸の世界で、まじないもよく使われ、良い旦那(パトロン)に出来るようにと無言参り[相原 2009: 68]³⁹⁾や夢占い[度会 1977]をする。全て顧客次第の花街では現世利益が願われる。

第六は、花街独自の年中行事の存在である。1月9日の始業式と8月1日の八朔は、花街の関係者だけが北野天満宮で祈願する行事である。かつて毎月開かれた、お茶屋の女将を中心とした尼講はご詠歌が中心だが、女性のネットワークとして機能して、次第に茶話会の性格を強め、情報交換をしたり、娯楽の要素も大きい。天満宮関係では、組織を担う7月3日の梅風講社の集まりが重要で、氏子としての奉仕であるが、上七軒が中心になる。地域社会としてのまとまりは、天満宮の年中行事との関わりを通じて強固になる。

第七は、花街の客寄せ行事への変化である。天満宮では2月25日の道真公の生誕日にはゆかりの梅に因んだ梅花祭がある。元々は道真公の祥月命日にあたる2月25日の縁日には、春咲の菜種を捧げる、菜種御供が行われた。しかし、道真公1050年の大萬燈祭にあたった昭和27年(1952)に秀吉公の北野大茶湯を催した故事に因んで、「梅花祭野点大茶湯」として開催して以来、野点の茶会と変わった。この行事は、上七軒の芸妓が梅の咲きはじめた天満宮内の野点として、寒さもやや弱まり句会等の行楽行事に転換した。昭和27年は奉納芸の「北野をどり」も始まるなど大きな転換があった。花街には人寄せの行事が必要であり、顧客等の外部の人を受け入れやすい形に変えていく。花街の信仰というよりも、各寄席を目的とした地域のイベントへの変化である。

第八は、古い家に棲む神々への信仰である。花街のお茶屋には独特の信仰世界が維持されてきた。地主さん、福神さん(恵比寿・大黒)、稲荷さん、巳さん、布袋さん、鐘馗さんなどと親しく呼び掛けられる。上七軒では地主さんは、形をあらわさない神として祀られている。白蛇は古い家には必ずいて、家の存続に寄与し屋敷を守ると信じられ、時々姿を現すという。白蛇の神の信仰を怠ったり妨げたりすると、必ず祟りが発生するという。七福神の信仰も篤い。一般には、恵比寿・大黒の二つが結合したものをいう。「お耳の大きな、立派なお顔のお方」(話者A)として家の中で信仰される。布袋さんも七福神に含まれる。上七軒では、昭和40年ころ頃までは、家庭で這子を作り、北野天満宮内の稲荷社や玄関灯に吊るしていたという。子供の這子姿を布で作った人形で、白絹の縫いぐるみに絹糸の黒髪をつ

け、金紙で束ねる。幼児の枕元に置いて災厄を人形につけて祓う。ただし、上七軒では人形は祓いよりも、芸の上達を祈願するものとして使われた。這子は玩具として猿子（負い猿）になって女子の遊びに使われ、飛騨高山では郷土玩具の「猿ぼぼ」となり、上七軒では庚申と習合して「猿たいこさん」として紅燈に吊るされて厄除けになった。

第九は、先祖供養の丁重さである。「精霊迎え」（六道参り）に始まり「五山送り火」に至る、精霊の迎えと送りの行事をしっかりと行う。「水回向」は8月7日から10日まで、8月13日に千本ゑんま堂の六齋念仏の「勧進廻り」を頼む。しかし、「勧進」は近年は呼ぶ家が少なくなったという。六齋念仏や施餓鬼供養にも参加する。16日は精霊送りで「水回向」をしてから、五山送り火を拝む。元お茶屋女将（話者A）は、8月16日の五山送り火では、その年亡くなった人の霊に手向けるので、女将が中心となって護摩木をとりまとめて、左大文字に奉納する役を果たす。地域の奉納分は各寺院からもまとめられ、共同祈願が盛んであることを物語る。なお、芸舞妓の間には、五山の送り火の灯りを盃のお酒に映して、願い事を念じながら呑むと願いが叶うという言い伝えがある。精霊送りが花街では独自の民俗へと変容して定着したと言えよう。

9. 考察

北野は京都の西北という周縁の場に位置し、都市と農村の境界であったが、徐々にマチとして都市の中に組み込まれたのである。御霊信仰や他界との接点であり、網野善彦のいう「無縁・公界・楽」に当てはまる場所である⁴⁰。そして、北野天満宮の門前町としてのマチの中にクルワが生成し、^{はなまち}花街、カガイへと名称を変えて現在に至る。早い段階から社会・文化・経済の全てに亘って、都市化の動きは大きな影響を与えた。

上七軒の顧客には北野天満宮の参詣客も多く、強い繋がり生きてきた。天満宮の年中行事には、春祭、北野祭、ずいき祭など農耕儀礼が中核にあり、基本は農村のムラの祭りである。祭神の菅原道真公に関わる御霊信仰、学問・技芸の神の信仰も重要である。

天満宮の影響は大きいだが、上七軒では多様な信仰が継承・融合して、ムラの民俗が都市化に伴って再構築され、マチの民俗として商業の場に相応しい機能を帯びたものに変容してきた。他方で、家の中では古い神々の機能が維持され、連続性がある。その中でも花街らしいと思われるのは、毎日、正月飾りを整えて、日々、ハレの世界が維持されていることであろうか。まさに、ハレの中のハレの場で維持される独自の伝承世界と言える。

花街でなぜ多くの信仰が共存し、維持されているかについて、幾つかの要点を指摘することが出来る。

- ① 「〇〇さん」のような信仰対象の擬人化により、あたかも家族のように、生活世界の中に、神々が溶け込んで共生している。
- ② 民間信仰や年中行事が、商売という世俗的な仕事の場と融合して、独自のマチ柄とでも言うべきものを生成している。
- ③ 顧客相手という不安定な状況の中で支えになるものが必要であり、目に見えるモノとは異なる目に見えない世界との関係を構築して安定感を得たいと考えている。
- ④ 上七軒の人々は、ウチとソトの境界、領域性を意識しており、信仰の対象に一定の範囲を設けて、マチの中のクルワ、あるいはマチ柄を独自のものにしてきた⁴¹。

ただし、上七軒の信仰で衰退や変容したものも少なくない。特に観念よりは実践に関わることが多い。第一は尼講で、お茶屋数の減少で開催数が減少し、娯楽の多様化や嗜好の変化で衰退してきた。第二は六齋念仏で「勸進廻り」の依頼が減少した。先祖供養の方法の多様化や意識の変化が原因で、担い手の子どもたちも減少した。第三は八乙女舞で、少子化による子供数の減少や舞の教授法の変化で指導者がいなくなった。第四は梅花祭に典型的に見られるように、年中行事が観光化して変質していくことである。第五は這子や芸上達などの個人の祈願が衰退したことで、芸に対する考え方の変化が大きい。

花街での信仰形態は現世利益中心に展開している。お茶屋は商売を営んでいるのであり、客は多く来れば来るほどよい。舞芸妓と顧客はもてなしを通して、相互に「花街らしさ」を共同で構築していく。時には年中行事を体験し、座敷の中のしつらえに信仰世界を発見し、相互に覚醒する機会が与えられる。舞芸妓はかつては近所の知り合いや血縁者の紹介があって入るなど、周囲の社会と共通の民俗世界を持っていたかもしれないが、現在では出身地や人生体験も様々である。このバラバラな基盤を花街のしきたりによって一つにまとめあげていくのは、芸による繋がりという不安定なものである。そこに柳田國男流の地縁や血縁を基盤に受け継いできた「心意現象」を見ることには無理がある。

マチはムラの伝承を受け継ぎつつも、独自に展開させた。都市の住民の流動性は高く、社会構造も農村と異なり、人間関係も複雑で、帰属する社会集団も様々である。しかし、京都では伝統を重んじる風土があり、多数の社寺が点在する「信仰都市」であり、民俗を維持し、新たなものを作り上げる源泉や活力がある。ただし、マチの中に出てくる花街（クルワ）は微妙に異なる。ムラでもなくマチでもなく、茶屋と芸舞妓と顧客の三者の関係性の中で独自の伝承を人工的に造り上げていく世界である。クルワではマチから民間信仰を積極的に取り込んで新たな民俗を能動的に創り上げ維持することも期待されている。花街の担い手は社会変動に対して敏感に対応すれば生き残れる。これを「伝承母体」と呼ぶことは躊躇するが、都市の「変動の担い手」として再評価する可能性はある〔有末 1981: 120〕。

顧客を迎え、常に「ハレ」の状態を維持するための原動力が花街の民間信仰であったのかもしれない。都市の専門的システムが社会的統合をもたらさない〔倉沢 1981: 20〕としても、花街では民間信仰が強く機能することによって結合の基盤を作り上げている。ただし、これは「信仰のるつぼ」と言われる京都において可能なことであり、日本全国全ての花街に共通しているとは言えない。上七軒では信仰に関わる行事のために、喫茶店や料理店で、細かい打ち合わせが毎日のように行われている。そこでは、単なる経済的利益の追求に留まらない、女性のネットワークが機能し、独自の「楽しみ」とでも呼ぶような「情感」が漂う。花街は決して特殊な場所ではなく、民間信仰を積極的に取り込み、ハレを意識的に顕在化して、ウチとソトを分離しつつ、したたかに生きていく生活共同体、正確に言えば「実践共同体」なのである⁴²⁾。花街は都市でしか生成しえない民俗世界を創造し続けることで生き延びてきたのであり、今後も社会変動に敏感に反応して存続する試みを展開していくであろう。

注

- 1) 都民俗学は、旧城下町や門前町、寺内町・市場町・宿場町などを事例とすることが多い。本稿もその延長線上にあるが変動の側面を重視する。
- 2) 大阪の現なんば（大阪市中央区、浪速区の地域）を中心に、昭和初期、南地五花街が営業していた。食満は大阪の花街について「五花街とは無論明治になってからつけられた名」とし、宗右衛門町（島の内）等の五花街（くわが）を数えている〔食満 1930: 26〕。
- 3) 式亭三馬の『昔唄花街始』[1844]によれば、花街は「くるわ」と呼んでいた。明治の三代目河竹新七の『籠

つるべさとのえいざめ
釣瓶花街酔醒』(1888年東京、千里座初)のように、「さと」の呼び名もあった。昭和の三宅孤軒『芸妓読本』[三宅 1935]では「かがい」とルビが打たれている。カガイという音読みは、時に遊興地や色町いろまちとして貶められる反動による権威付けと見られる。

- 4) 上七軒には、「かどの八百屋さん」と呼ばれる京都西賀茂地方(右京区)の農家の女性が荷車で生鮮食品を売りに来る。
- 5) 上七軒の起源に関する史料は「京都府下遊廓由緒」(1872)しかない。そこには「上七軒ハ往古ヨリ七軒茶屋ト相唱、足利氏武將之頃、北野社造営之砌七軒茶屋モ残木ヲ以テ造作ニ相成候由」[新撰京都叢書刊行会(編)1986]とあり伝説の域にとどまる。
- 6) 話者は、A(元お茶屋女将70歳代)、B(現お茶屋女将、60歳代)、C(元芸妓、60歳代)、D(現役芸妓、60歳代)、E(元芸妓の姉妹、60歳代)、F(現祇園甲部パー女将、60歳代)、G(元上七軒仲居、70歳代)、H(祇園甲部女将、60歳代)。
- 7) 江戸時代以前は北野天満宮天神といい、神仏分離以後は北野神社に改名され、戦後に北野天満宮の旧称に復帰した。
- 8) 天慶5年(942)7月12日に多治比文子たじひのあやこという童女に右近の馬場に天満宮を祀れとの神託があったが、家が貧しく祀れずに自宅近くに祀った。天曆元年(947)、近江国比良宮の神主神良種みわのよしたねの子の太郎丸という7歳の少年にも神託があり、数千本の松が一夜にして右近の馬場に生じたので、文子・良種・北野朝日寺の僧最鎮等が協力して、6月9日に現在地に天満宮を建立したという。文子の宅跡には文子天満宮を建て、傍らに七保会御供所の会所をおき、北野神人しにんが奉仕し、7月12日を例祭日に定めた。寛永2年(1625)の神輿の寄進を機に、4月7日出御、4月16日還幸とした。明治6年に天満宮境内の現在地に遷座、旧地には明治35年に小祠を建てて御旅所とし4月12日から16日まで神輿を奉安して往時を偲んだ。現在は4月第3日曜日に還幸祭、3日前に本社から御旅所に神輿が出御する。
- 9) 慶長8年(1603)には出雲阿国が歌舞伎を初めて興行したことで知られる。
- 10) 道真公が大宰府で彫った木像を随行した西ノ京の神人が持ち帰って祀り、収穫時に野菜や穀物を供えたのが始まりという。本来は8月の北野祭で行われた。最終日の還幸祭は「おいでまつり」ともいい、大宰府で亡くなった道真公の御霊が神様として初めて北野の地を訪れるという意味だという。本来は8月の北野祭で行われた。
- 11) 3日目に西ノ京七保会による甲御供奉饗が行われる。4日目はずいき御輿が巡行する。北野祭で供えられた野菜を、慶長の頃から一基の大型御輿に飾り付けた。屋根はずいき芋(里芋の茎)で葺き、神輿の各部は穀物や野菜・湯葉・麩などの乾物類で覆われている。四隅の瓔珞は乾燥した金盞花の花で、四面には謡曲や昔話の人物の造り物が取り付けられている。江戸時代には八基が各町から出た、現在は西ノ京の二基のみである。
- 12) 平成22年(2010)3月25日に歌舞練場の改修工事が完成し、3月25日から4月7日の日程に繰り上げられた。
- 13) 毎年8月4日の北野天満宮の例祭は本殿祭と神幸祭が一体となっていたが、応仁の乱で神幸祭が途絶えた。それを明治8年に神幸祭の復興を願った多数の氏子が梅風講を組織して、祭典の必要経費を負担すること等を条件として、10月にずいき祭として行われる。
- 14) 北野天満宮には二つの大きな特徴がある。第一は京都全体の鎮護の社の性格である。天満宮は京都の西北(戌亥)にあり「乾の隅」の守りとして、皇城鎮護の願いをこめて建立されたと伝え、疫病や災難を避ける厄除けの神、朝廷と都に住む人を守護する社として、篤い信仰を集めて来た。節分の日に追われて逃げた鬼は「乾の隅」に逃げ込むとされ、昔から悪鬼の住む魔所といわれ手厚く祀られる。節分の日には、北野天満宮・吉田神社・壬生寺・八坂神社の四社寺を参詣する「四方詣り」で、無病息災、招福を願う習慣がある。比叡山は都の東北(丑寅)の鬼門にあたり、延暦寺を創建して都の鎮護とした。延暦寺と北野天満宮は密接な関係があり、共に、都の北方を守護した。空間の配置が重要である。第二は御霊信仰である。北野の地主神は火雷神であったが、菅原道真が奉齋されて発展した。祭神の道真公は政争の犠牲となって非業の最期を遂げ、死後に怨霊となって都に疫病や災害をもたらしたので神として祀った。御霊信仰に基づいており、怨霊を鎮め、悪疫退散を祈る御霊会は貞観五年(863)に御所の南の神泉苑で初めて行われた。その後、東山の祇園御霊会や北野の紫野御霊会(船岡山)へと展開した。前者は八坂神社の祇園祭、後者は今宮神社の「やすらい花」となって現在に至る(西陣が支えてきた)。双方は共に御霊信仰で結びついており、祇園の茶屋に崇徳上皇を祀るのもこの連続性上にある。北野は祇園と並ぶ、京都の周縁の地であった。花街がこの二か所に栄えたのは偶然ではない。
- 15) 最近の宮司は、香西、片桐、浅井、梶、橘と受け継がれてきた。

- 16) 1日目の御旅所での「着御祭」と、5日目の本社での「后宴祭」で奉納される。
- 17) ずいき祭の神幸祭では八乙女が随伴し、沿道数キロを保護者が着物姿で随行する。八乙女の子供用の座布団を持って歩くので重労働である。
- 18) 元は西向と東向の二堂であったが、西向観音堂は廃絶した。
- 19) 小野篁の伝承は近代以降に創りだされた可能性が高い。現在の寺伝は、『千本ゑんま堂由来記』（1956編纂）に基づく。定覚上人の開基が本来のようである [松山 2009: 199]。
- 20) 元々は「江州音頭」などを踊っていた。2009年7月26日匠会は「上七軒盆踊り」と銘打ち、1950年当時の上七軒の芸妓連が録音したレコードを元に「西陣音頭」を復活させて、盆踊りに組み込んだ。
- 21) 空也が鉦太鼓を囃子として踊った踊躍念仏が始まりといわれ、悪鬼が出て悪さをするという六齋日に念仏を唱えたという。風流化して能・狂言・歌舞伎を取り込んだのが、西陣の西北部の芸能系六齋で、念仏が主体のものを念仏系六齋という。
- 22) 現在では千本釋迦堂、六波羅蜜寺、壬生寺でも行う。珍皇寺は『雍州府志』（貞享元年・1684）に行事が記され、千本ゑんま堂は『京華要誌』（明治28年・1895）に記録がある。
- 23) 京都の各地で行われている六齋念仏を伝承していくために、相互に連携して「子供六齋教室」を運営して、不特定の公演も行っている。
- 24) ここでの話は藤波源信（1959～）を指すと思われる。飯室谷の酒井雄哉の千日回峰行に随身し、昭和59年（1984）に百日回峰を満行、一旦、俗世に戻る。その後、発願して、平成5年（1993）から12年間の籠山行に挑み、併せて千日回峰を行い、回峰行は平成15年（2003）9月18日に満行して、10月19日に宮中への土足参内加持を行った。平成17年（2005）に籠山行十二年を達成した。平成19年10月21日には星野圓道が達成した。
- 25) 内海俊照阿闍梨（1927～）で平成6年（1994）、師匠の叡南覚照を継ぎ赤山禅院住職となり叡南俊照と名乗る。千日回峰は、酒井雄哉、光永覚道、上原行照、藤波源信と続いた。
- 26) 陰陽道については、清明神社の戦略による陰陽道ブームの影響がある。「平安時代の地図見てたらな、大將軍あんねんけど、天神（天満宮）さんなんかあらへんえ。八陣社はありますねん。」（話者E、平成21年10月4日）。天満宮より古い社を祀るという発想は面白い。
- 27) 祇園甲部では紅燈に付けるのは誤りとしている。
- 28) 建仁寺の鎮守社を明治の神仏分離に際して寺侍が譲り受けて独立した神社になったという。十日えびすの縁起物の福笹の授受を初めて行った社はここだとされる。
- 29) 寺院の須弥壇上、身分の高い人や僧侶の頭上に吊るす。権威の象徴や魔除けでもある。
- 30) 住吉大社に伝わる踊りで、頭取りが長柄の傘を持ち、柄を扇子で打ちながら歌をうたい菅笠の童子がその周りを団扇を打ちながら踊りまわる。田植神事の最後に踊る田楽舞は神功皇后が新羅との戦いに勝利して凱旋した際、祝福歓迎で踊ったのが始まりと伝える。
- 31) 色については白黒が好きだが最近では赤金（話者B）、お茶屋は白黒（話者K）、お茶屋は白黒、店は赤金（話者F）などとの答えが返ってきた。
- 32) 大阪の住吉大社は芸妓との関連が深く、影響があるかもしれない。御田植祭では新町花街の芸妓が植女^{うえめ}を引き受け、稚児を出して、住吉まで山車を仕立てて練り歩いたという。現在では芸妓に巫女が粉黛式を行って植女の資格を与えて、御田植神事に参加させる。
- 33) オクドはかつては家の生活の中心の大切な場所で、丁寧に神を祀った。
- 34) 富山県高岡市金屋町では、唐辛子を横向きに21個糸で吊るしたお守りを玄関内側に飾る類似した習慣がある。韓国のお守りとは別のものかもしれない。
- 35) 同様な習慣として、石川県金沢市の東の花街のお茶屋では、卯辰山入口にある高野山真言宗の長谷山観音院の印を押したとうもろこしを逆さまに吊して玄関に飾る。同寺は天平年間に芋搦藤五郎が行基に依頼して十一面観音を祀ったことに始まるという。前田家が産土神として篤く信仰し、元和2年（1616）に現在の卯辰山に移築された。旧暦7月9日にとうもろこしを買って四万六千日供養した功德があるとされている。
- 36) 崇徳院（崇徳上皇）の御廟は、東山通から西側の万寿小路に面し、祇園歌舞練場の東側である。後白河院が崇徳院の怨霊を慰めるために鴨川の東に建てた粟田宮が移転した。
- 37) 例えば「孝」が上の名で、姉芸妓がくじで「丸」を引くと「孝丸」という名ができる。
- 38) 花街からの引退を「引き祝い」といい、この時に出す三角の奉書状の紙に名前が出ると、源氏名から本名に戻

る。ただし、こうした風習も今は形骸化した。二度と戻らない時は白蒸のおこわを、戻る可能性がある時は白蒸と赤飯の紅白のおこわを配った。源氏名を使う間が花街の成員で、その中での秩序が維持されていることがわかる。

- 39) 願掛けの無言参りは最近では形骸化し、お茶屋(屋形)が許可しない。無言参りをしたければ、花をつけてもらってやりなさいというせちがらい世になった。しかし、顧客側では話しかけないとか、個人の願いを妨げない作法が出来ていて、本人の意志を尊重する。
- 40) 千本通は平安京の中央の「朱雀大路」で、北の先に船岡山があり、山の西北は蓮台野(北山)で、^{あだしの} 仏野(嵯峨)や鳥辺野(東山)と並ぶ風葬地であった。船岡山も五山送りの一つの場所である。千本通の名称は葬地へ向かう途中での卒塔婆の数の多さに由来する。千本ゑんま堂には現世と他界を往復したという小野篁の伝承が残る。東山の松原通「六道珍皇寺」は小野篁が他界へ赴いた入口とされ、冥土から現世への出口は嵯峨釈迦堂(清涼寺)の東隣の六道町にあった福生寺(廃寺)という。現在は、清涼寺西門近くの「薬師寺」(旧福生寺)の脇に「生の六道」の石柱がある。上七軒と祇園の花街は境界の地に立地した。網野善彦[網野 1987]の説を敷衍すれば、遊廓は他から支配や統御を受けない無縁の場に成立し、「公界」として独立性を維持して、自由な「楽」の世界を作ったが、江戸時代になって権力の支配下に置かれて悪所や遊廓として隔離され、「苦界」に生きる遊女の世界に変わったということになる。
- 41) 祇園甲部と上七軒の信仰の違いも、マチ柄の違いによると考えられている。信心深いDや、上七軒と縁の深い人々、上七軒の他の住民も同様な意見であった。
- 42) 「正統的周辺参加」(LPP: Legitimate peripheral participation) のことで、今後の課題とする。定義は「社会的な実践共同体 communities of practice への参加の度合いを増すこと」で、共同体への参加の過程が学習であり、初めは正統的で周辺のだが、徐々に関わりを深めて複雑さを増していく。実践によって作り出されていく共同体に注目する [レイブ, ウェンガー 1993]。

参考文献

- 相原恭子 2007『京都舞妓と芸妓の奥座敷』文藝春秋。
- 網野善彦 1987『無縁・公界・楽—日本中世の自由と平和—』[増補] 平凡社(初版1978)。
- 有末 賢 1981「都市民俗研究への一視角」『哲学』第73集, 三田哲学会, pp. 101-123.
- 井上年和 2011「北野の七軒茶屋について」『平成23年度日本建築学会近畿支部研究発表』日本建築学会近畿支部, pp. 861-864.
- 井ノ口有一 1967「京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究(Ⅰ)」『京都府立大学術報告: 人文』京都府立大学, pp. 127_a-105_a.
- 井ノ口有一 1968「京都市室町・西陣・祇園における言語生活の調査研究(Ⅱ)」『京都府立大学術報告: 人文』京都府立大学, pp. 164_a-120_a.
- 加藤政洋 2005『花街—異空間の都市史』朝日新聞社。
- 京都市編 1980『史料 京都の歴史上京区』第7巻, 平凡社。
- 倉石忠彦 1990『都市民俗論序説』雄山閣出版。
- 倉沢 進 1981「1970年代と都市化社会」『社会学評論』31巻4号(124号), pp. 16-31.
- 食満南北 1930『上方色町通』四六書院。
- 櫻井徳太郎 1971『民間信仰と現代社会』(日本人の行動と思想9) 評論社。
- 櫻井徳太郎 1982『日本民俗宗教論』春秋社。
- 城月雅大他 2010「花街・上七軒における歴史的町並みの保全活動の変遷—本当の『住民主体』のまちづくりとは何か?—」『歴史的防災論文集』Vol. 4, 立命館大学歴史都市防災研究センター, pp. 317-324.
- 新撰京都叢書刊行会(編) 1986「京都府下遊廓由緒」『新撰京都叢書』9巻, 臨川書店(原版, 明治5年[1872])『出版條例』写本)。
- 田口光一 1980「都市民俗研究の一課題—花街という職業人社会—」『長野県民俗の会通信45』長野県民俗の会, 45号, pp. 1-7.
- 中原逸郎 2012「花街の芸の再創造—京都北野上七軒における石田民三の寄与を中心に—」『人間と社会の探究 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』73号, pp. 57-77.

- 西尾久美子 2007『京都花街の経営学』東洋経済新報社.
- 西沢暢晃 2008「花街のおもてなし文化の変遷と課題について—祇園甲部の地方、幸長さんの談話をもとに—」『京都産業大学日本文化研究所紀要』12/13, 京都産業大学, pp. 129-146.
- 福田アジオ 1983「村落の構成」福田アジオ, 宮田 登 (編)『日本民俗学概論』吉川弘文館, pp. 35-45.
- 松山由布子 2009「京都の都市民俗と伝承世界—小野篁往来譚を中心に—」『名古屋大学大学院文学研究科 教育研究促進室年報』3号, pp. 196-200.
- 宮田 登 2006「民俗学と都市研究」『都市の民俗学』(宮田登日本を語る9) 吉川弘文館.
- 宮本袈婆雄 2009「禁忌と祈願」福田アジオ, 宮田 登 (編)『日本民俗学概論』吉川弘文館, pp. 148-158.
- 三宅孤軒 1935『芸妓読本』全国同盟料理新聞社.
- 柳田國男 1993『明治大正史 世相篇』講談社学術文庫 (初版 1931).
- 米山俊直 1974『祇園祭』中央公論社.
- 度会恵介 1977『京の花街』大陸書房.
- レイブ・ジーン, ウェンガー・エティエンヌ 1993『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』(佐伯 胖訳) 産業図書. (Lave, Jean, Wenger, Etienne, *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, New York: Cambridge University Press, 1991).